

鎮咳去痰薬

製品群No. 26

資料4-20

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 副作用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重 篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他 剤との併用 により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ
気管支拡張成分	テオフィリン テオドール錠100mg/ テオドール錠200mg	テオフィリンは、気管支拡張、肺血管拡張、呼吸中枢刺激、気道の粘液線毛輸送能の促進、横隔膜の収縮力増強、肥満細胞からの化学伝達物質(気管支収縮因子)の遊離抑制等の作用により、気管支喘息、慢性気管支炎、肺炎腫瘍の閉塞性肺疾患の諸症状を改善する。	他のキサンチン系薬剤・中枢神経興奮薬(過度の中枢神経刺激作用)、交感神経刺激剤(β刺激剤の副作用症状を増強)、ハロタン(不整脈等の副作用が増強)、塩酸ゲタミン(興奮)、シメチジン・塩酸メキシレチン・塩酸プロパフェン・塩酸アミオダロン・エノキサシン・ピベミド酸三水合物・塩酸シプロフロキサシン・ノルフロキサシン・シロキサシン・メシル酸トスフロキサシン・メシル酸バズフロキサシン・フルイフロキサシン・エリスロマイシン・クラリスロマイシン・ロキシマロマイシン・チアベンダゾール・塩酸テクロピジン・塩酸ペラミル・塩酸ジルチアゼム・マレイン酸フルボキサミン・フルコナゾール・ジスルフィラム(テオフィリンの中毒症状)、アシクロビル・塩酸パラシクロビル・インターフェロン・イブuprofen・シクロスポリン・アロプリノール(テオフィリンの中毒症状)、ザフィレルカスト(テオフィリンの中毒症状)、リファンピリン、フェニバルブタール、ランソプラゾール、リトナビル(テオフィリンの効果が減弱)、フェニトイン・カルバマゼピン(テオフィリン及び相手薬の効果が減弱)、ジピリダモール(ジピリダモールの作用を減弱)、ラマトロバン(ラマトロバンの血中濃度が上昇)、リルゾール(リルゾールの作用を増強(副作用発現))、タバコ(テオフィリンの中毒症状)、セイヨウトチリソウ含有食品(血中濃度が低下)	痙攣・意識障害、急性脳症、横紋筋融解症、消化管出血、赤芽球病、肝機能障害、貧血、頻呼吸	アナフィラキシーショック	0.1~5%未満(頭痛、不眠、めまい、振戦、動悸、不整脈(心室性期外収縮等)、悪心、嘔吐、食欲不振、腹痛、腹部膨満感、下痢、消化不良(胸やけ等)、血尿酸値上昇、CK(CPK)上昇、蛋白尿、ALT(GPT)、ALP、LDHの上昇、貧血)、0.1%未満(しびれ、不随意運動、筋緊張亢進、頻脈、顔面潮紅、顔面蒼白、しゃっくり、AST(GOT)の上昇、けん怠感、むくみ、胸痛)、頻度不明(神経過敏、不安、耳鳴、頻尿)	頻度不明(食欲不振、悪心)、0.1~5%未満(胃部不快感)	高齢者	本剤又は他のキサンチン系薬剤に対し重篤な副作用の既往歴	てんかん、甲状腺機能亢進症、急性腎炎、うつ血性心不全、肝障害、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、産婦、授乳婦、小児、乳幼児、低出生体重児、新生児	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	テオドール錠100mg: 通常、テオフィリンとして、成人1回200mg(本剤2錠)を、小児1回100~200mg(本剤1~2錠)を、1日2回、朝及び就寝前に経口投与する。また、気管支喘息として成人1回400mg(本剤4錠)を、1日1回就寝前に経口投与することもできる。 テオドール錠200mg: 通常、テオフィリンとして、成人1回200mg(本剤1錠)を、1日2回、朝及び就寝前に経口投与する。また、気管支喘息については、テオフィリンとして成人1回400mg(本剤2錠)を、1日1回就寝前に経口投与することもできる。	気管支喘息、喘息性(様)気管支炎、慢性気管支炎、肺炎腫	
去たん成分	グダイフェネシン	フラストジル系/フラストジル錠(共通の添付文書)なお、フラストジル錠は後発医薬品	鎮咳作用、気管腺分泌促進作用															グダイフェネシンとして、通常成人1日300~900mgを分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。一般に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。	下記疾患に伴う咳嗽及び喀痰排出困難感、急性気管支炎、慢性気管支炎、肺結核、上気道炎(咽喉頭炎、鼻カタル)
	グアヤコール スルホン酸カリウム	なし																	

鎮咳去痰薬

製品群No. 26

資料4-20

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重 篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化				
		併用禁忌(他 剤との併用により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
去 たん 成分	塩化プロムヘ キシム	ピソルポシ 錠	頻液性分泌 増加作用。 酸性糖蛋白 溶解・低分子 化作用。 肺表面活性 物質の分泌 促進作用。 線毛運動亢 進作用。			アナフィラキ シー様症状 (頻度不明)	0.1~5%未 満(悪心、食 欲不振、胃部 不快感、腹痛 、頭痛)、 0.1%未満 (血痰)	頻度不明(過 敏症)		本剤の成分に対し 過敏症の既往歴	高齢者、妊婦又は 妊婦している可能 性のある婦人、低 出生体重児、新生 児、乳児、幼児又は 小児			通常成人には1回1錠(塩 化プロムヘキシムとして 4mg)を1日3回経口投与 する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。一般に高齢 者では生理機能が低下し ているので減量するなど注 意すること。	急性気管支 炎、慢性気管 支炎、肺結核、 塵肺症、手術 後
消 炎 薬	塩化リゾチー ム	レフトーゼ錠	抗炎症作用。 膿瘍形成・組 織修復作用。 膿粘液の分解 と排出作用。 出血抑制作 用			ショック、アナ フィラキシー 様症状、SJS症 候群、Lyell症 候群(頻度 不明)	0.1~5%未 満(下痢、胃 部不快感、悪 心、嘔吐、食 欲不振)、 0.1%未満(口 内炎等)、頻 度不明(肝機 能障害 (AST(GOT)、 ALT(GPT)、 Al-P、γ- GTP、LDHの 上昇等、めま い)	0.1%未満(過 敏症)		本剤の成分過敏 症の既往歴。卵白 アレルギー(アナ フィラキシー・ショッ クを含む過敏症 状)	アトピー性皮膚炎、 気管支喘息、薬剤 アレルギー、食物ア レルギー等のアレ ルギー性要因、両 親、兄弟等がアレ ルギー症状の既往 歴、高齢者		作用機序は 解明されてい ない点も多 く、用量・効 果の関係も 必ずしも明ら かにされてい ないので、漫 然と投与しな い。	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の 融解、痰の切れが悪く、喀 出回数の多い気管支炎、 気管支喘息、気管支拡張 症の喀痰喀出困難、小 手術時の術中術後出血の 場合、通常、成人は1日塩化 リゾチームとして、60~ 170mg(力価)を3回に分 けて経口投与する。2.歯槽膿 漏症(炎症型)腫脹の融解 の場合、通常、成人は1日 塩化リゾチームとして、180 ~270mg(力価)を3回に分 けて経口投与する。高齢 者減量	1.慢性副鼻腔 炎の腫脹の融 解、痰の切れ が悪く、喀出 回数の多い気 管支炎、気管 支喘息、気管 支拡張症の喀 痰喀出困難、 小手術時の術 中術後出血(歯 科、泌尿器科 領域)の場合 2.歯槽膿漏症 (炎症型)腫脹 の融解の場合

鎮咳去痰薬

製品群No. 26

資料4-20

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用量(上限があるもの)	過量使用・誤使用のおそれ			
抗ヒスタミン成分	ホララミン錠 2mg	抗ヒスタミン作用		中樞神経抑制剤・アルコール・MAO阻害剤・抗コリン作用を有する薬剤(相互に作用を増強)、ドロキシドパ、ノルエピネフリン(血圧の異常上昇)	痙攣・錯乱・再生不良性貧血・無顆粒球症(頻度不明)	ショック(頻度不明)	5%以上又は頻度不明(鎮静、神経過敏、頭痛、焦燥感、複視、眩暈、不眠、めまい、耳鳴、前庭障害、多幸症、情緒不安、ヒステリー、振戦、神経炎、協調異常、感覚異常、霧視、口渇、胸やけ、食欲不振、悪心、嘔吐、腹痛、便秘、下痢、頻尿、排尿困難、尿閉等低血圧、心悸亢進、頻脈、肩外収縮、鼻及び気道の乾燥、気管分泌液の粘性化、喘鳴、鼻閉、溶血性貧血、肝機能障害(AST(GOT)・ALT(GPT)・Al-Pの上昇等)、悪寒、発汗異常、疲労感、胸痛、月経異常、0.1%未満(血小板減少)、眠気を催すことがあるので自動車の運転等危険を伴う機械の操作		本剤の成分又は類似化合物に対し過敏症の既往歴、線内障(白内障の増悪)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(症状の増悪)、低出生体重児・新生児(痙攣等の重篤な反応があらわれるおそれ)					ホララミン錠(クロルフェニラミン)として、通常、成人には1回2mgを1日1~4回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	じん麻疹、血管運動性浮腫、枯草熱、膚疾患に伴うそう痒(湿疹、皮膚炎、皮膚そう痒症、薬疹)、アレルギー性鼻炎、血管運動性炎、感冒等上気道炎に伴うしゃみ、鼻汁、咳嗽。	